原　著

長久手市市内一斉防災訓練に参加した看護学生の学習成果

河村　諒[1)]，國松　秀美[2)]，坪井　秀介[3)]，臼井　千津[4)]

[1)]愛知医科大学看護学部

[2)]聖泉大学看護学部

[3)]常葉大学健康科学部看護学科

[4)]高知県立大学大学院看護学研究科

（前　愛知医科大学看護学部）

（2018 年 10 月 1 日受付）

要旨：目的：長久手市市内一斉防災訓練（以下，防災訓練）に参加した看護学生の学習成果を明らかにする．

方法：研究対象者は，A 大学看護学部で災害看護学を履修した看護学部 2 年生 42 名である．防災訓練に参加後のリフレクションシートから学習成果を抽出し，質的記述的に分析した．

結果：リフレクションシートから【看護観が変容する機会】【臨床実習と防災訓練での環境の違い】【地域で生活している住民を知る】【防災訓練の意義】【災害発生時の避難所看護の在り方】【内服薬やお薬手帳の携帯の必要性】【外国人被災者への支援策】の 7 つのカテゴリーが抽出された．

考察：防災訓練に参加したことで看護観を見直す機会となった．臨床実習とは異なる環境のため，地域住民の対応に難渋する場面もあったが，災害時の活動は場所を選ばないことや，生活に視点を当てた看護が体感できていた．今後，災害看護に精通した教員の協力を仰ぎ，防災訓練での学習成果が更に充実するような教授方法を構築していく必要がある．

（日職災医誌，67：249―255，2019）

―キーワード―

防災訓練，看護学生，災害看護教育

I. はじめに

近年，多発する地震災害に対応し被害を最小限に止めるためには，事前に災害リスクを理解し，家具の固定や食料の備蓄等による「備え」を行うことが重要である．加えて，地域で開催される防災訓練に参加し，避難行動や発災時は近隣の人と助け合う等の「自助・共助」が必要となる[1)]．平成 20 年度に保健師助産師看護師養成学校指定規則が改正され「看護の統合と実践」における「災害看護学」が導入されている．A 大学看護学部では平成 12 年度の創設時から全国に先駆けて「災害看護学」の科目を設置し，災害看護教育に力を注いできた．また，平成 26 年度から長久手市が主催する長久手市市内一斉防災訓練（以下，防災訓練）に「災害看護学」の演習として参加してきた．これは，市や地域住民からの要請から実現したものであり，教育活動と同時に地域貢献の一環として，学生の取り組む姿勢に評価が得られている．

さて，長久手市の総人口は，58,268 人であり年々増加している．平均年齢 39.7 歳であり，生産年齢人口（15 歳以上 65 歳未満）が 65.3%，老年人口（65 歳以上）が 16.3% である[2)]．近年，高齢化が進む日本の人口動態の推移としては珍しく，比較的若い都市として位置づけられている．防災訓練は，南海トラフ巨大地震を想定し，市民，ボランティア団体，自主防災組織，各種防災関係団体との協調，防災意識の高揚，実践的な災害対応力の向上を図ることを目的に毎年実施している．訓練方針は，市内で震度 6 強の地震が発生したとの想定下，会場（市内 6 小学校）ごとに地域住民が主体となり防災関係団体，市職員が協力し一斉に訓練を実施している．市内 6 小学校が一斉かつ同時に防災訓練を実施しているケースは全国的にみても珍しい．また，訓練内容としては，避難訓練・避難誘導訓練，避難所誘導訓練（避難者名簿作成，被害情報の収集，避難所資機材設営・取り扱い等），避難者については自治会非加入者についても必ず受付し，名簿を作成している．さらに，要配慮者への対応訓練，災害発生を想定した訓練（シェイクアウト，消火訓練，救助・救

護訓練，家具の転倒防止等），指定避難所以外の施設等を避難所とした場合の対応訓練も実施している．

看護基礎教育課程における適切で効果的な災害看護教育，特に防災訓練を活かした体験型学習プログラムの必要性が指摘されている[3]．先行研究では，体験型学習プログラムに参加した学生は患者・家族[4)5)]，看護者・救護者としての体験をしている[6)7)]．さらに，参加した学生は，災害時のイメージ化ができ[4)8)]，学習の動機付けや学習意欲の向上に繋がり，効果的な学びをした[4)7)]とポジティブに評価している．しかし，これらの報告は病院主体の防災訓練に参加した看護学生の受動体験であり，自らの実践ではない．今回のように実際に看護学生が市職員と協働し，また地域住民と直接関わって，その体験を報告した症例は数少ない．今回「災害看護学」を選択した学生が防災訓練当日に被災者健康チェックおよび健康相談（血圧測定）等を実施した．そこで，防災訓練後初めてリフレクションシートを導入したため，その学習成果について報告する．

II. 目　　的

防災訓練に参加した看護学生の学習成果を明らかにする．

III. 研究方法

当日のスケジュールは，「9時に巨大地震（震度6強）が発生した」という想定で防災訓練はスタートした．住民は自宅から徒歩で最寄りの一時避難場所（公園）までの避難訓練・避難誘導訓練を実施し，各小学校において避難所運営訓練（避難者名簿の作成，被害情報の収集）や資機材設営・取り扱い訓練等を実施する．防災関係機関は，無線機を用いて災害対策本部との通信訓練を実施した．

看護学生は，市内6カ所の小学校に7名の学生グループを編成し，各小学校体育館内で待機した．当日の指導体制は，科目担当教員2名（2小学校分担・巡回），保健師2名（2小学校に各1名）である．今回の研究対象者は，A大学看護学部で「災害看護学」を履修した2年生42名であり，1年生前期の看護入門実習（1単位）および2年生前期の基礎看護実習（1単位）を修了（看護過程を踏まえ，専門性のある臨床実習は3年生後期から展開）している．また，災害看護学の科目概要は，全8コマの1単位選択科目である．講義構成としては，災害看護の概念および歴史，CSCATTTの特徴，災害サイクルの各期に応じた看護の特徴，避難所・仮設住宅・地域看護，災害がこころに及ぼす影響とケア，応急処置等の講義・演習を取り入れている．講義最終日には，長久手市主催の本防災訓練への参加をもって終了としている．

今回，各小学校の体育館内にブースを設営し，訓練用の被災者健康チェックを用い，健康相談（血圧測定等）を行った．基本データ（人数および年齢等）は単純集計とした．また，防災訓練後に初めてリフレクションシートを導入し，質的記述的に分析を行った．分析の信頼性・妥当性を高めるため，繰り返し元データを精読し，科目担当教員および共同研究者らと共に内容の類似性に基づきカテゴリー，サブカテゴリーを抽出した．調査項目は，リフレクションシートから防災訓練を通して感じ得たこと，看護技術（問診，血圧測定等），今後の課題（改善点を含む）とした．尚，個人が特定されないよう無記名自記式質問紙とし，提出までには防災訓練終了後から1週間の期間を設けた．防災訓練終了後のリフレクションシートの記入および提出に関して，学業成績には一切影響しないこと，研究への参加は全て自由意思であることを事前に説明し，了承は得ている．

IV. 結　　果

今回の防災訓練の参加者数は3,808人であった．これは当時の長久手市総人口の約6.7%にあたる．A大学看護学部のブースで被災者健康チェックを受けた住民は，長久手小学校34名，東小学校62名，西小学校45名，南小学校42名，北小学校18名，市が洞小学校78名であり合計279名であった．年齢別内訳は，65歳以上が225名（80.6%），20～50代（幼児・児童に付き添い参加）が34名（12.1%），10代（中高生）が14名（5.0%），外国籍住民（留学生含）が6名（2.1%）であった．参加者の最も多い高齢者の活動レベルは，概ね（一部，杖歩行・車椅子）が独歩であった．また，健康への関心が高く，持病（腰痛，膝関節症，糖尿病，高血圧等）は有してはいても，かかりつけ医がおりセルフマネジメントが概ね確立されていた．

防災訓練後のリフレクションシートの回収率は90.4%であった．質的記述的分析の結果，7カテゴリー，21サブカテゴリー，111の記述内容に集約・分類できた．以下は【　】はカテゴリー，『　』はサブカテコリー，「　」は記述内容とする（表1）．

「地域の方々は，看護師や保健師の様に私たちが何でも分かるように質問してくる人が多いため，看護学生として倫理感のある行動をしていかなければいけない」等から『看護学生としての意識の向上』する機会となった．「未来の看護職者として災害時のニードを適切に判断し，充足できるようにこれまでの学習を振り返り今後の学びを大切にしていきたい」等から『将来の看護師像をイメージ』することができていた．また，「立札に“看護学生”と書いてあっても地域の人は医療人という目で見ているため，どのような場でも対応していくことができるよう知識や技術を身に付けていきたい」から『看護学生＝医療従事者として捉えられ信頼されていることを実感』していた．さらに，「実際の被災地でもパニック状態で整った環境で血圧測定や問診を行えるわけではないため，

表 1　長久手市市内一斉防災訓練に参加した看護学生の学習成果

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容
看護観が変容する機会	看護学生としての意識が向上	地域の方々は，看護師や保健師の様に私たちが何でも分かるように質問してくる人が多いため，看護学生として倫理感のある行動をしていかなければいけない． A 大の学生というだけで地域の方にとても信頼してもらえていた気がする．地域の方にとって A 大病院の信頼が高いことが実感でき，もっと相応しい学生にならなければと思った．
	将来の看護師像をイメージ	地域の人々の期待に応えられるような看護職になりたいと改めて感じた． 未来の看護職者として災害時のニードを適切に判断し，充足できるようにこれまでの学習を振り返り今後の学びを大切にしていきたい．
	看護学生＝医療従事者として捉えられ信頼されていることを実感	立札に“看護学生”と書いてあっても地域の人は医療人という目で見ているため，どのような場でも対応していくことができるよう知識や技術を身に付けていきたい． まだまだ未熟な大学 2 年生でも看護職に近いものとして捉えられているということを改めて体感できた．
	看護技術を向上させる必要性	実際の被災地でもパニック状態で整った環境で血圧測定や問診を行えるわけではないため，様々な対応力を養うためにたくさんの経験が必要だと思った． 実際の災害時には更に騒がしくなっており問診や血圧測定が今回のようにスムーズにできなくなることが考えられるがその時こそ冷静に対応していけるように技術を訓練する必要がある．
臨床実習と防災訓練での環境の違い	周囲の音による血圧測定の困難感	血圧測定の際，たくさんの人が体育館にいて，歩いたり話したりする声で聴診法での音が全然聞き取れなかった．周りが静かな環境であることがとても大事なんだと改めて実感した． 振動でテーブルが揺れるのと周りの人の足音や話し声で，正確に血圧測定をすることが難しいと感じた．
	静かな病室での血圧測定とは異なる	血圧を測っている時に周りの話し声や足音で演習や病棟実習といった静かな空間よりも聞き取りにくい． 病院とは違い体育館では子どもが走っていたり，雑音が多くその中で血圧測定やコミュニケーションをとることは難しかった．
	知識・看護技術不足の実感	血圧測定の時は長袖の服を何枚も着込んでいる人が多くて脱いでもらうことに手間をかけてしまったので工夫してやれたら良かった． 突然，住民の方に避難のことや病気のことについて質問され上手く応えられず自分の知識不足を感じた．
地域で生活している住民を知る	地域住民の特性理解	地域の人たちが集まって話をしていたり，お互いの身体の状態のことを気遣っている姿をみかけた．この訓練で久し振りに会う人たちも沢山おり，会話が弾んだり安心したような顔をしていた． 災害時に独り暮らしの高齢者の方は近所の繋がりがあって，もしも何かあった時には救助してもらえるように普段から準備していることがわかった．
	減災への取り組み	市が一丸となり防災訓練を行い住民たちが積極的に参加することにより災害時における避難生活であったり，備えるべき防災グッズなどの情報を得ることができる機会があるというのはとても良いことだ． 地域の連携が大切であり防災訓練を行うことで災害に対しての知識がある人を増やすことが大切だ．
	他の地域の防災訓練と比較	今回の訓練に参加して，他地域に比べて被災する人が少なくなるだろうと思えるくらい充実していた． 地元ではこのような地域での防災訓練はなく，どこに集まるのか等の基本的な情報しかわかりません．今回は防災訓練に参加しようと住民の方たちが行列を作っていたことにはとても驚いた．
	地域住民の健康状態の把握	健康チェックで更年期の方の半分以上が高血圧の症状があり薬も服用していることが分かった． 心臓や循環器系に持病を持っている人が多く，しかも日常的に降圧剤や抗凝固剤といった薬を常飲している方がほとんどだった．
防災訓練の意義	訓練参加が地域と繋がる場	地域の人の顔を知ることができ住民同士で繋がりが生まれ，避難する時に助け合ったり一体感に役立つ． 参加賞のために訓練に来たとしても避難場所などを知ってもらう価値は大きく地域住民に参加してもらうような呼び掛けが大切である． 参加している人数が多く子どもから高齢者まで様々な世代が集まるので防災への関心や地域の方同士が交流を持てる良い機会だと感じた．
	訓練に参加していない住民にこそ働きかけが必要	訓練に参加して下さる人はもともと意識の高い方だと思う．万が一の時に命を守り健康を保つためには，参加していない人にこそ働きかけるべきである． もし，本当に災害が起こった時にどこに集まりどのような流れで避難し，避難所でどういうことを行うのか参加しながら知ることが出来るというのは全ての住民に有意義であると感じた．
	既存の災害対策の見直し	日頃の心構えが万が一の時に安心に繋がるので，自身の災害への備えをもう一度見直そうと思う． 地域の防災意識を上げることで震災が発生した時でも被害を最小限にすることができるだろうと思った．

表 1 長久手市市内一斉防災訓練に参加した看護学生の学習成果（continued）

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容
災害発生時の避難所看護の在り方	被災地での体験談	東日本大震災で被災者の受け入れをした福祉施設の話を聞き，人を対象として働くということは，震災時は責任が伴うということを学んだ. 人は昔あった恐ろしい体験や記憶も時間とともに忘れてしまうことが多いが，被災地に行った自衛隊の方の話を聞いて災害の恐ろしさを再確認できた. 防災訓練に参加することで地震が起きた時の身の守り方や土のうの作り方を初めて学んだ.
	要配慮者への対応	ひどく息を切らしていた方が何人か見受けられ，もし実際に被災した場合は，避難所までの移動が困難であり，避難生活でも常飲薬が入手できずに健康問題を起こすと思う. 問診をしていて疾患を抱えながら地域で生活している人がこんなにも多く，災害という環境の変化で状態が悪化してしまった時に対応できる力の必要性を学べた. ヘルパーさんに車椅子を押してもらい参加している方々が沢山いたり，目が見えない方もいて避難所にはその地域に住む人が避難してくるので，その方たちの十分な情報提供と安全な空間を作ることが大切だ.
	看護の原点を再認識	普段の問診とは異なり，災害時は特に不安な気持ちを汲み取り，サポート，ケアを行う必要があるため傾聴が重要であると分かった. 大地震を経験すると少なくとも恐怖心が心に植え付けられるため，寄り添うことが大切である.
	他職種の協働	トイレを作る担当の人，プライベートスペースを作る担当の人など専門の方が知識を出して，多くの職種が関わっていることが知れた. 炊き出しでは，豚汁があり，アレルギーの考慮がされており大豆アレルギーの人でも飲むことができるようになっていたのは驚いた.
外国人被災者への支援策	外国人被災者への支援策	同じ大学の人がスペイン語で通訳してくれたが，もし，いなかったらやはり英語は大切だし，外国人の被災者は少なからずいるから，分かり易い日本語でその人たちにも平等に対応できるための支援が必要だ.
内服薬やお薬手帳の携帯の必要性	内服薬やお薬手帳も持ち出して避難することの重要性	防災訓練にお薬手帳を持って来ている人はいなかったので，もし意識を失って自己表現ができないことが発生してもお薬手帳から持病が分かり適切な対処ができるので持参する必要があることを伝えられた. 避難の途中で怪我や具合が悪くなって治療を受ける際に，お薬手帳を見ればすぐに治療を受けやすくなると思うので，持ってくるように呼びかけることは重要である.
	内服薬やお薬手帳を持参していない	問診時では持ち出し袋の準備はあるが薬剤の準備やお薬手帳がないことがわかった. 問診で現在通院治療を受けている方が多く，避難所に薬やお薬手帳を持参してきた人が殆どいなかった.

様々な対応力を養うためにたくさんの経験が必要だと思った」ことより『看護技術を向上させる必要性』を実感していた．これらのことから，看護学生としての【看護観が変容する機会】となっていた．

「振動でテーブルが揺れるのと周りの人の足音や話し声で，正確に測定することが難しいと感じた」ことから『周囲の音による血圧測定の困難感』を体験していた．また，「病院とは違い体育館では子どもが走っていたり，雑音が多くその中で血圧測定やコミュニケーションをとることは難しかった」という経験から『静かな病室での血圧測定とは異なる』ことが認識できていた．さらに，「突然，住民の方に避難のことや病気のことについて質問され上手く応えられず自分の知識不足を感じた」ことから『知識・看護技術不足の実感』があった．これらより，普段の【臨床実習と防災訓練での環境の違い】を体感する機会となっていた．

「地域の人たちが集まって話をしていたり，お互いの身体の状態のことを気遣っている姿をみかけた．この訓練をする中で久し振りに会う人たちも沢山おり，会話が弾んだり安心したような顔をしていた」こと等から，防災訓練に参加している『地域住民の特性理解』ができていた．また，「地域の連携が大切であり防災訓練を行うことで災害に対しての知識がある人を増やすということが大切だ」ということから『減災への取り組み』について考えることができており，「地元ではこのような地域での防災訓練はなく，どこに集まるのか等の基本的な情報しかわかりません．今回は防災訓練に参加しようと住民の方たちが行列を作っていたことにはとても驚いた」という内容から，『他の地域の防災訓練と比較』することや「心臓や循環器系に持病を持っている人が多く，しかも日常的に降圧剤や抗凝固剤といった薬を常飲している方が殆どだった」という実状から『地域住民の健康状態の把握』ができていた．これらより，【地域で生活している住民を知る】ことに繋がっていた．

「地域の人の顔を知ることができ住民同士で繋がりが生まれ，避難するときに助け合ったり一体感に役立つ」「参加賞のために訓練に来たとしても避難場所などを知ってもらう価値は大きく地域住民に参加してもらうような呼び掛けが大切である」という内容から年に１回の『訓練参加が地域と繋がる場』となっており，「訓練に参加して下さる人はもともと意識の高い方だと思う．万が一の時に命を守り健康を保つためには，参加していない人にこそ働きかけるべきである」ことから，『訓練に参加していない住民にこそ働きかけが必要』となる．また，「日頃の心構えが万が一の時に安心に繋がるので，自身の災害への備えをもう一度見直そうと思う」ことから『既存の災害対策の見直し』をすることにより，【防災訓練の意義】について考えられていた．

「東日本大震災で被災者の受け入れをした福祉施設の話を聞き，人を対象として働くということは，震災時は責任が伴うということを学んだ」等から『被災地での体験談』を聴く機会があった．また，「ひどく息を切らしていた方が何人か見受けられ，もし実際に被災した場合は，避難所までの移動が困難であり，避難生活でも常飲薬が入手できずに健康問題を起こすと思う」「ヘルパーさんに車椅子を押してもらい参加している方々が沢山いたり，目が見えない方もいて避難所にはその地域に住む人が避難してくるので，その方たちの十分な情報提供と安全な空間を作ることが看護として大切だ」という具体的な内容から『要配慮者への対応』について考えられていた．さらに，「大地震を経験すると少なくとも恐怖心が心に植え付けられるため，寄り添うことが大切である」ことにより『看護の原点を再認識』していた．避難所を想定した生活としては，「トイレを作る担当の人，プライベートスペースを作る担当の人など専門の方が知識を出して，多くの職種が関わっていることが知れた」ことや「炊き出しでは，豚汁があり，アレルギーの考慮がされており大豆アレルギーの人でも飲むことができるようになっていたのは驚いた」という内容から『他職種の協働』の実態が確認できていた．これらのことから【災害発生時の避難所看護の在り方】について考えられていた．

「同じ大学の人がスペイン語で通訳してくれたが，もしいなかったら，やはり英語は大切だし，外国人の被災者は少なからずいるから，分かり易い日本語でその人たちにも平等に対応できるための支援が必要だ」という内容から【外国人被災者への支援策】について考えられていた．

「避難の途中で怪我や具合が悪くなって治療を受ける際に，お薬手帳を見ればすぐに治療を受けやすくなると思うので，持ってくるように呼びかけることは重要である」等から『内服薬やお薬手帳も持ち出して避難することの重要性』について学べていた．また，「問診で，現在通院治療を受けている方が多く，避難所に薬やお薬手帳を持参してきた人が殆どいなかった」ことから『内服薬やお薬手帳を持参していない』という実状が把握でき【内服薬やお薬手帳の携帯の必要性】が学べていた．

V. 考　　察

今回の防災訓練に参加した科目担当教員および保健師によれば，学生は積極的に参加し，其々が役割を考え分担するような行動が見られた．リフレクションシートから，臨床経験も浅く看護学を学ぶ初学者とはいえ，地域に出て住民と関わり，“看護学生”と掲げていたことで，看護職者となる自覚を再認識できたのではないかと考えられた．災害直後の避難所では医療器材はゼロに等しい．災害発生により多数の傷病者が避難所に押し掛けることで物的・人的資源は限られ，ライフラインも途絶えたなかで，傷病者に医療を提供しなければならない．災害時

こそ看護の原点に戻り，臨機応変で柔軟な対応と創意工夫が求められる．災害看護教育について山本は，災害は自分にも起こること，発生時には自己の意識を災害モードに素早く切り替えることができるような教育が必要である[9]と述べている．今回の防災訓練で看護学生は雑踏の中，被災者健康チェックや血圧測定の実施に苦慮しており，正確に情報収集する方法や手技についての課題は記述されていた．しかし，息切れ等の症状を呈している住民もいたことは事実であるため，今後は住民の手足に触れ，フィジカルアセスメントを活用し，自己の意識を切り替えて，防災訓練の場で実践できるようなシミュレーション教育も必要であると考える．

今回の防災訓練は近隣住民の安否確認の場として機能していた．これは，住民の特性や活動レベルが把握できる良い機会といえる．リフレクションシートからも推察できるように訓練に参加できていない住民にこそ災害時の対応を考えていく必要がある．例えば，人工呼吸器や酸素濃縮器などの医療機器が使用できない状態になれば生命の危険にさらされる．地域で生活する要配慮者にとって災害時は特に課題が大きい．要配慮者にとって安心・安全を最優先に考えた看護の在り方について考えられるような教授内容を検討すべきである．2016 年の熊本地震では，乳幼児や要介護者を抱える家族は，避難所生活で不便さや他の避難者への気兼ねから，避難所を離れて車中泊や在宅避難を余儀なくされた．2011 年の東日本大震災では，災害拠点病院を含む医療機関が複数被災し，救急患者の受け入れ医療機関が不足したばかりか，交通インフラの被災で住民が医療機関にたどり着けない事態が発生した．これらの過去の教訓を活かし，受傷時や普段使用している道路が利用できない場合の迂回路について学生自身も把握しておかなければならない．先ずは学生の生活圏内で地区踏査等が有効と考えられる．さらに，避難所生活（間仕切り等の個人スペース，段ボールベッド体験，食事への配慮，排泄方法等）そのものが実体験できるような演習形態等が望まれる．

リフレクションシートから内服薬やお薬手帳の持参がなかったという実状が確認できた．災害時では慢性期に入っても，医療や介護が必要な在宅高齢者の実態を把握できない状況が続く．日頃から体調を崩しやすい要介護者，要支援者は，避難生活で医療需要度が増すことが多いため，「健康手帳」や「お薬手帳」に診療サマリーや起こり得る病態（喘息注意，心不全注意，便秘）の記載をつけ，常に持ち歩ける情報や持病薬 7 日分程度を手帳と供に確保し，重要な薬（インスリン，抗凝固薬等）が不足した場合には避難所や救護所に申し出る等の説明が加えられると良かった．

さらに，長久手市の在住外国人は 900 名を超えており年々増加傾向にある[10]．特に災害時の自助の促進のために，言葉に配慮した情報提供，継続的な教育の提供[11]，が求められており，外国人の地域コミュニティでの交流を自治体関係者と協働することで，避難所での外国人の孤立化を防ぎ得るような方略についても考えていく必要がある．

以上から，リフレクションシートから多くの所見があった．分析を通して，災害看護の教授内容も焦点化でき，新たな課題も明らかとなった．例えば基礎看護学では，避難所生活という限られた空間でより快適に避難生活（食事・排泄・感染症対策等）を送ることができるかの方法，地域看護学では，避難所看護の役割を，成人看護学では，トリアージの概念，深部静脈血栓症対策，呼吸循環動態の観察，止血法等を，老年看護学では，避難所での口腔ケアの在り方，仮設住宅での高齢者独居等を，精神看護学では心のケア等，其々の領域の特性を活かしたオムニバス形式でシラバスを構成することで，災害看護教育そのものの質が向上するのではないかと考える．

総じて，臨床実習とは異なる状況下にあり，対応に難渋する場面もあったが，災害時の活動は場所を選ばず臨機応変であることが体感でき，住民の生活に視点を当てた避難所看護が学習できたのではないかと考えられた．今後，これらの学習成果がさらに向上・充実できるような授業展開の構築が急務といえる．

利益相反：利益相反基準に該当無し

文　献

1）内閣府：平成 29 年度防災白書特集第 2 章 2―2 避難生活及び自助・共助等の取組．http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h29/honbun/0b_2s_02_02.html（参照 2018-9-28）．
2）平成 30 年度　長久手市 HP．https://www.city.nagakute.lg.jp/jyouhou/toukei/azabetujinkou.html（参照 2018-11-15）．
3）南　裕子：災害看護学構築に向けての課題と展望．看護研究　32（3）：3―11, 1999.
4）新美綾子，堀井直子：大規模災害訓練の看護基礎教育における活用の検討～負傷者役として参加した看護学生の体験から～．日本看護医療学会誌　6（2）：23―32, 2004.
5）中信利恵子，植田喜久子：災害トリアージ訓練における模擬患者役看護学生の体験からみた教育的課題．日本災害看護学会誌　8（1）：72, 2006.
6）西上あゆみ，西岡ひとみ，稲垣美紀，他：総合病院における災害医療訓練にボランティア参加した看護学生の学び．大阪府立看護大学紀要　7（1）：47―53, 2001.
7）熊谷久子，蛯名きえ：看護基礎教育における災害看護教育に関する考察―総合病院の災害訓練に参加した学生の学びから―．日本災害看護学会誌　8（3）：31―39, 2007.
8）石川真衣，山田洋子，武藤紀子：学士課程自由選択科目における災害地域看護教育方法の検討．千葉大学看護学部紀要　28：51―58, 2006.
9）山本あい子：災害看護学教育と意識の災害モードへの切り替え．看護研究　32（3）：217―220, 1999.
10）長久手市：平成 29 年度　ながくての統計．2018-1-30. https://www.city.nagakute.lg.jp/jyouhou/toukei/nagakute_

toukei/documents/02jinkou.pdf（参照 2018-9-28）.
11）藤田さやか：日本に在住する外国人の災害への備えの認識と現状．日本災害看護学会誌　19（3）：39―49, 2018.

別刷請求先　〒471-8565　愛知県豊田市白山町七曲 12―33
日本赤十字豊田看護大学
河村　諒

Reprint request:
Ryou Kawamura
Japanese Red Cross Toyota College of Nursing, 12-33, Nanamagari, Hakusancho, Toyota, Aichi, 471-8565, Japan

Learning Outcomes of Nursing Students Who Participated in Disaster Training Nagakute City

Ryou Kawamura[1], Hidemi Kunimatsu[2], Shusuke Tsuboi[3] and Chizu Usui[4]
[1]Aichi Medical University College of Nursing
[2]Seisen University Faculty of Nursing
[3]Tokoha University Faculty of Health Science Department of Nursing
[4]Graduate School of Nursing University of Kochi Research

Objective: To clarify the learning outcomes of nursing students who participated in disaster training Nagakute city.

Method: The research subjects were 42 nursing students who were in disaster nursing studies at the University A College of Nursing. Learning was extracted from the reflection sheet after participation in Nagakute city disaster training and analyzed qualitatively.

Result: We extracted seven categories as follows:【Opportunities for change of nursing view】【Difference in environment between clinical training and disaster training】【To know the residents living in the area】【Significance of disaster training】【The way nursing at the evacuation center should be in case of disaster】【Necessity to carry oral medicine and medication notebook】【Support measures for foreign victims】.

Conclusion: It was an opportunity to review nursing views by participating in disaster training.

Due to the environment difference from the clinical training, there were scenes that it was difficult for the local residents to respond, but we were able to experience nursing that focused on life, choosing the place at disaster activity. In the future, we need to consider classroom development so that teachers who are familiar with disaster nursing help cooperate and learning in regional disaster training will be improved.

(JJOMT, 67: 249―255, 2019)

―Key words―
disaster training, nursing student, disaster nursing education

©Japanese society of occupational medicine and traumatology　http://www.jsomt.jp